様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３４５１１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ１０２９８

研究課題名（和文）専門看護師と認定看護師が提供する看護サービスのアウトカム評価指標開発

研究課題名（英文）evelopment of outcome measures for nursing services provided by certified nurse specialists and certified nurses

研究代表者
洪　愛子（KO, Aiko）

神戸女子大学・看護学部・教授

研究者番号：６０５９１７９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：専門看護師(CNS)の活動から8つ、認定看護師(CN)の活動から8つ、計16の活動を抽出した。16の活動を基に指標として発展可能な6つを示した。(1)慢性病看護の面白さを看護師が体験できることを助ける(2)看護師とCNS/CNが一緒に患者ケアに参加することで患者・看護師に個別に詳細に対応（3）患者の視点に立ち、状況を解きほぐして伝えることで看護師の現象の見方を支える（4)CNS/CNが表に立ち一人で実践するのではなくチームで取組みチームで成長(5)看護師が自身で動くことができ、CNS/CNが部署の外側と繋がり、実践を広げる場を作ることを支える(6)患者が利用できる看護の場を広げる、であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
慢性疾患看護分野におけるCNSとCNが提供する看護サービスの評価指標の開発への示唆としては、看護サービスの成果を適切に測っていくためには、看護師が慢性疾患患者へ楽しく関心を向けているか、対応が難しい事例に対し視点を切り替えた経験を持ち合わせているか、仕事を面白いと感じているかなど、CNS/CNが活動しているフィールドにおいての看護師の実践の向かい方、そして看護チームの連携などが測定できる指標が必要であること、活動指標を広がりとしてとらえ、広がりのプロセスで段階として捉えることができる可能性があった。専門看護師と認定看護師の活動評価指標開発はCNS/CNの活動推進につながる。

研究成果の概要（英文）：A total of 16 activities were extracted, 8 from the activities of professional nurses and 8 from the activities of certified nurses. This paper shows 6 developable as an index based on 16 activities. They were (1) to help nurses experience the fun of chronic disease nursing, (2) to respond in detail to patients and nurses individually by allowing nurses and CNS/CNs to participate in patient care together, (3) to support nurses' view of the phenomenon by taking the patient's perspective and disentangling and communicating the situation, (4) to help CNS/CNs work as a team and grow as a team rather than standing in the open or practicing alone, (5) to support nurses who can move by themselves and create a space for CNS/CNs to connect with the outside of the department and expand their practice, and (6) to expand the nursing space available to patients.

研究分野：看護管理

キーワード：専門看護師　認定看護師　活動評価　看護サービス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

医療の高度化や専門化、国民の健康意識への高まりに合わせ 1994 年に専門看護師制度、1995 年に認定看護師制度が発足し、25 年以上が経過した。専門看護師の役割は実践・相談・調整・倫理調整・教育・研究の 6 つの役割をもって保健医療福祉や看護学の発展に貢献することであり、認定看護師の役割は実践・指導・相談の 3 つの役割をもって看護の現場でケアの広がりと質の向上を果たすことである。専門看護師（以下 CNS とする）は現在 2,479 人、13 分野までに至り、認定看護師（以下 CN とする）は 20,721 人、21 分野に達している（公益社団法人日本看護協会ホームページ 2020.2.26 閲覧）。近年では、CNS/CN は、困難事例に対する高度看護実践者としての役割だけでなく、他職種と連携することやチーム医療の推進者として、その役割や活動が変化しているが、CNS/CN の活動や教育の効果、看護サービスに対する経済的評価を含む指標は確立されてない(洪, 2011；吉村, 洪, 2015)。研究者らの経験上、実際の臨床現場では CNS/CN はジェネラリストナースの仕事の効率・知識・技術・職場満足度を高めることや、離職予防にも影響を与え、患者や家族のケアへの満足度も高めている。しかし、CNS/CN が提供する活動の成果について、海外のような客観的評価がほとんど開発されておらず、アウトカムに焦点をあてた適切性・有用性を備えた評価指標の開発が進んでいない現状がある（Loveman E. et al., 2010；Robin P. et al, 2011）。

以上のような背景を踏まえ、CNS/CN が提供する看護サービスの評価指標を開発することを目的とし、本研究では評価指標開発の第一段階として、CNS/CN における活動の抽出を慢性疾患看護分野において行うことを試みる。今回の研究では少子高齢化への対応、地域の病床や在宅医療・介護の充実、国民の健康増進、疾病の予防及び早期発見などを積極的に促進する必要性がある慢性疾患看護分野に着目し、ハイリスクで複雑なニーズをもつ患者のケアをするための人材として CNS/CN が活躍していることに焦点を当てた。

２．研究の目的

急性期医療から在宅医療、病院から地域へと患者の療養の場が拡大するなかで、特に活動を視覚化して評価することが難しい慢性疾患看護分野における CNS/CN が、所属組織や活動の場で協働するスタッフへどのような影響や教育の成果があるのかを明らかにし、CNS/CN の活動を抽出し、評価指標としていくことを目的とする。

３．研究の方法

慢性疾患看護分野における CNS/CN の活動の目的は看護の質を向上させることにある。慢性疾患看護分野の CNS/CN の活動を調査するための方法としては、協働する看護管理者、ジェネラリストナース、CNS/CN 本人から直接情報を得ることが適切であると考えた。なお、CNS と CN では共通する部分はあるが、基本的には活動範囲や役割が異なるため、データ収集と分析の際は、CNS と CN を分けて扱うこととした。

本研究では、2 つの用語を次のように定義した。

①看護サービス

看護サービスとは、主に市場または経営学の視点から捉えた看護職の行為をいい、サービスの受け手である顧客（患者やその家族）をいかに満足させ得るかが基本的な関心事となる。ここでのサービスとは、人や組織体に何かの価値をもたらす活動のことを指す。

②CNS/CN の活動

CNS/CN の活動とは、CNS/CN が所属する組織の内外で行っている動きや働きを表す。具体的には、CNS/CN が患者・家族に行うケア、スタッフの教育やキャリア支援、チームや組織に対する教育やプログラム構築などの組織への働きかけ、ジェネラリストナースへのロールモデルになることなどを指す。

(1) 対象とする分野の特定

対象は CNS に関しては慢性疾患看護を対象とし、CN に関しては現行の 21 分野のうち、慢性疾患に携わる 9 分野（皮膚・排泄ケア、訪問看護、糖尿病看護、透析看護、摂食・嚥下障害看護、認知症看護、脳卒中リハビリテーション看護、慢性呼吸器疾患看護、慢性心不全看護）を対象とする。なお、がん看護は慢性疾患看護に含まれると考えられたが、CNS/CN の専門分野としてがん看護は独立して設置されていることや、対象の専門範囲を絞ることにより精緻な分析と信憑性の高い結果を得ることに繋がると考え、本研究では対象から除外した。

(2) 分析の対象とするデータの特定

CNS/CN の活動を身近で経験し、看護への影響を感じ取りやすい状況にある人として、第一に CNS/CN 本人、第二に CNS/CN の管理者、第三に CNS/CN と協働している看護師という、3 つの立場の看護師にインタビューを行い、3 つの立場から語られた CNS/CN の活動とその影響を分析の対象とする。管理者は CNS/CN に対する立場が管理するという形、協働するスタッフは協働するという形であれば、職位や資格等の保持などの条件は問わないこととした。

本研究では、患者の健康維持・回復、病勢の悪化予防、エンド・オブ・ライフケアなど、患者個人への看護サービスについても調査の対象とする。しかし、症状の改善や維持、身体活動の改善や習慣の変化、体調管理の方法の変化など、患者個人の変化を調査することは、質と割合を数値化することに限界があり、分析が難しいと考えた。慢性病の予防・維持期にある患者の場合、CNS/CN の活動の成果として、身体管理や健康管理の達成度を評価することは可能であるが、重

症患者やエンドステージにある患者においては、病勢の強さや不可逆的な身体状態の悪化があるため、CNS/CN が介入しても身体状態の改善は乏しいことがある。そのため、患者の身体状態や健康状態を直接的には調査・分析の対象とはしないこととした。しかし、CNS/CN 本人、協働する看護管理者とジェネラリストナースへのインタビューによって語られた患者の変化は分析の対象とした。

(3) 研究デザイン

本研究は質的帰納的研究のデザインとした。病院施設に勤務する①CNS/CN、②CNS/CN を管理する立場にある看護管理者、③CNS/CN と協働したことのある看護師（先輩・同僚・後輩）、にインタビューを行い、CNS/CN の活動とその影響を分析することで CNS/CN の活動を抽出した。なお、①CNS/CN、②CNS/CN を管理する立場にある看護管理者、③CNS/CN と協働したことのある看護師（先輩・同僚・後輩）へのインタビューは、すべて一人の個人を対象とした。

(4) 分析方法

インタビューで得た録音データを文字に起こし、順序性と話し手の区別を明確にしたうえで、グループの話の流れに沿った資料を作成する。その際、話された言語だけでなく、インタビュアーが掴んだ雰囲気や話題のきっかけ、話し手の流れの変化の理由など、当日に得た情報や、言語化されていない情報を資料に加えていった。

インタビュー資料を何度も読み返し、個々の CNS/CN の経験したエピソードや活動状況を整理した。その際、話の中から見えてきた研究対象者の所属する病院・病棟などの特徴や文化、地域における役割や課題、CNS/CN の置かれている立場や経験年数、協働する医療従事者との協働についても分析の対象としていった。病院・病棟などの特徴や文化、地域における役割や課題、CNS/CN の 置かれている立場や経験年数、医療従事者との協働についても分析するためのデータとした。

CNS/CN が活動について話した内容を話し手本人が評価している解釈に合わせ、活動としていること、活動が効果的であったこと、活動が影響を及ぼしたことに整理した。そこから CNS/CN が捉えている、あるいは捉えられている活動とはどのようなことがあるのかを抽出した。

看護管理者や協働する看護師のインタビューでは、経験したエピソードや捉えている状況を個々に抽出し、看護ケアにおける個人やチームの成長や過程を整理する。そこから看護管理者または協働する看護師の側からみた活動としてはどのようなことがあるのかを抽出した。

3 つの立場のインタビューから抽出した内容、個人から抽出した活動を照らし合わせ、相応点や矛盾点を明確にしたうえで、活動の成果やアウトカムとなる指標を抽出した。指標を抽出したあと、もう一度個々の CNS/CN、看護管理者、協働する看護師の語った内容、インタビューグループで話した内容と合致しているか、研究メンバーで点検を行う。CNS と CN では日本看護協会の定める役割が異なる為、CNS/CN の役割の相違性を理解した上で、区分して分析を行った。

(5) 倫理的配慮

研究対象者の不利益は、自身の活動への評価を周囲のスタッフや管理者から聞くことや、インタビューによる時間的拘束がある。インタビューの実施は、病院管理者に立ち入り許可を受けた上で、研究対象者のプライバシーが確保できる研究協力施設内もしくは学内の個室を使用する。インタビューを研究対象者の勤務時間内に行うか、時間外に行うのかは、当該研究協力施設の規定と管理者の指示に従った。

インタビューを受ける対象者の利益として、今までの自分自身の活動を振り返ることで活動への意味づけが思い起こされ、新しい意味づけをもつことにつながると考えられる。研究を開始するにあたっては、「神戸女子大学・神戸女子短期大学　人間を対象とする研究倫理委員会」の承認[番号：2021-12]を得て行った。本研究では最初に CNS/CN に内諾を得てから正式に組織に依頼するという手続きを取る。その際には、対象候補者に研究協力を文書で依頼し、同意は個々に書面にて得る形式とし、強制力が働かないように配慮する。また、参加への是非について意思決定できるように時間的に配慮を行う。

また、研究への参加は自由であり、拒否した場合でも不利益を被ることはないこと、CNS/CN の働き方や勤務態度を評価するものではないこと、同意した場合でも研究協力の辞退はいつでも可能であることを説明し、同意を得る。研究協力について了承を得た研究対象者の所属する施設、もしくは部門の責任者に研究協力を依頼し、施設の倫理規定に応じた。

４．研究成果

専門看護師 2 名、認定看護師 6 名、専門看護師・認定看護師を管理する立場にある看護師３名、専門看護師・認定看護師と協働する看護師３名を対象とし、CNS/CN の活動を抽出した結果、専門看護師の活動から 8 つ、認定看護師の活動から 8 つ、16 の活動を見出した。専門看護師から見出された活動は、①慢性病患者への関心を高めることができるよう看護師を刺激し、理解できない行動をする患者を一度理解できると引き込まれるような慢性病看護の面白さを看護師が体験できるようにする。②患者の身体状態をアセスメントする道筋、患者が実際の生活の中でどこまでできるかを判断するさじ加減、患者のこだわりやルールに対して個別に詳細に対応することを看護師に手ほどきする。③患者と接する態度と同じように看護師に対しても個人の持つ力に合わせて支援の仕方を模索する。④看護師が本当は自分で患者をケアしたいけれどできない悔しさがあることと、患者のためを優先させると自分ではない看護師がみるべきだと判断し

たその全体性を捉えることができる技量を認めながら接する。⑤看護師達は患者を「どのような目」でみているのかに着目し、状況を捉えなおしたうえで看護師が新たな見方で事象を見ていくことを支える。⑥CNS と看護師それぞれで違った役割を分担しながら協働し、多くの力で患者ケアに取り組み、チームでケアを行う。⑦看護師が自身の知識や考え方、患者に実践した方法を声に出したり、記録に残したりすることで表現し、慢性看護の実践を広げていくことを導く。⑧逃げ場がない患者にとって生きるために来ないといけない医療の場を存続させていく、であった。認定看護師から見出された活動は、①看護師が患者のことを分かること、看護が楽しいと思うことができる環境を整え、急性期の患者をみていく中で慢性病看護の面白さを感じ取ることを助ける。②決まった業務をこなす、何か看護師ができることをやるのではなく、患者の状況に耳を傾け、患者の話を十分に聴いたうえで、看護師が何をするのかが決まることを説く。③看護師が自分本位な看護を実践していることに気づくことができる力を見越したうえで、患者が療養上でできなかったことではなく、今後何ができるのかに看護師が目を向けていくことができるようにする。④臨床実践で学ぶこと、臨床の場以外で補う機会を設けることの両方の場を作りながら、看護師自身が安心してその場に居ることができる足場を作っていく。⑤看護師が自己の実践を見せたり、考えや意見を声に出したり書いたりし、表現することを実際にやってみるように促し、ともにチームで成長していく。⑥患者の意向だけでなく、患者に向かう看護師の意向を聴き、皆で話し合う場と機会を必ず設ける。⑦上司や周囲の人に看護の実践者として信頼されることで、医療チームの中で看護師は自分が取ることができる役割を考えられるようになり、看護師が自身の裁量で動くことができることを増やしていくことができるようにする。⑧外来、地域へと院内から院外に看護が提供できる場を広げ、慢性看護の対象を個人から集団へと拡げていく、であった。

16 の活動は、共通した 6 つの活動として示すことができた。(1) 慢性病看護の面白さを看護師が体験できることを助ける (2) 看護師と CNS/CN が一緒に患者ケアに参加することで患者・看護師に個別に詳細に対応する (3) 患者の視点に立ち、状況を解きほぐして伝えることで看護師の現象の見方を支える (4) CNS/CN が表に立ち一人で実践するのではなくチームで取り組み、チームで成長する(5)看護師が自身で動くことができ、CNS/CN が部署の外側と繋がり、実践を広げる場を作ることを支える、(6) 患者が利用できる看護の場を広げる、である。

慢性疾患看護分野における CNS/CN における活動から見えてきた看護サービスの評価指標の開発への示唆としては、看護サービスの成果を適切に測っていくためには、看護師が慢性疾患患者へ楽しく関心を向けているか、対応が難しい事例に対し視点を切り替えた経験を持ち合わせているか、仕事を面白いと感じているかなど、CNS/CN が活動しているフィールドにおいての看護師の実践の向かい方、そして看護チームの連携などが測定できる指標が必要であること、活動指標を広がりとして捉え、広がりのプロセスで段階として捉えることができる可能性があった。

今回、慢性看護領域における CNS/CN の活動を抽出したことによって、活動の特徴や活動の広がり方が明らかになり、看護のスペシャリストによる看護サービスが個人や集団としての患者、看護師、医療チームにどのような価値としての変化をもたらしているのかを具体的に示すことができた。CNS/CN における活動を抽出できたことは今後、スペシャリストのサービスの成果を測っていく評価指標を開発するためのヒントとなる。また慢性看護の領域には、がん看護、家族看護、母性看護、小児看護、老年看護、精神看護など、多くの領域と共通する要素が含まれていると考えられ、スペシャリストによる活動を検討していく基盤材料となると考えられる。

看護サービスの成果を適切に測っていくためには、看護師が慢性疾患患者へ楽しく関心を向けているか、対応が難しい事例に対し視点を切り替えた経験を持ち合わせているか、仕事を面白いと感じているかなど、CNS/CN が活動しているフィールドにおいての看護師の実践の向かい方、そして看護チームの連携などが測定できる指標が必要であること、活動の指標を広がりとしてとらえ、広がりのプロセスを段階として捉えることができることで測定できる可能性が示唆として得られた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 藤原由子　元木絵美　奥井早月　鷲田幸一　川畑愛子　岸野真由美　横内光子　洪愛子
２．発表標題 慢性疾患看護の分野における専門看護師と認定看護師の看護サービス活動の抽出
３．学会等名 日本看護科学学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 奥井早月　横内光子　洪愛子
２．発表標題 糖尿病看護における看護実践の評価指標に関する文献検討
３．学会等名 日本看護研究学会第45回学術集会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	奥井　早月 (OKUI Satsuki) (00783002)	神戸女子大学・看護学部・助教 (34511)	
研究分担者	横内　光子 (YOKOUCHI Mitsuko) (10326316)	神戸女子大学・看護学部・教授 (34511)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	野並　葉子 (NONAMI Yoko) (20254469)	神戸女子大学・看護学部・教授 (34511)	
研究分担者	鷲田　幸一 (WASHIDA Koichi) (30803241)	兵庫県立尼崎総合医療センター（研究部）・その他・看護師 (84518)	
研究分担者	元木　絵美 (MOTOKI Emi) (70382265)	神戸女子大学・看護学部・講師 (34511)	
研究分担者	藤原　由子 (FUJIWARA Yoshiko) (70549138)	神戸女子大学・看護学部・准教授 (34511)	
研究分担者	川畑　愛子 (KAWABATA Aiko) (60910742)	神戸女子大学・看護学部・助教 (34511)	
研究分担者	岸野　真由美 (KISHINO Mayumi) (80963404)	神戸女子大学・看護学部・助教 (34511)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関